

Veryの想い出

——veritas; verai; vero——英語の語源と由来——

菅 沼 惇

目 次

1. 何にもならない言葉very
2. veryの真意とまつわる言葉
3. veryとアキノ大統領又は比政変
4. veryの起源
5. veryに対応する古期英語
6. 中期英語以降で
7. まとめ

1. 何にもならない言葉very

ことばの中にも大変重要そうなことばもあれば、そんなに重要でないようなもの、また何にもならないようなものまであるようである。

この「何にもならない」とか大変見くびったことばを使ってしまって大変申し訳ないと思うが、何でも、致し方ない、言わなければならないものは言わなくてはならない。ただ「ようなもの」と少しは遠慮気味には言ったつもりではある。英語にも何かそのような「ことば」があるようであるが、その中の一つが‘very’である。

ただ一寸気がねしたい心理の状況では何となく付けたくて付けたくて仕様のない言葉である。だから英語を習い始めた中学生も、片言英語を会話の中に挿しはさむ一般の大人も「ベリ グッド」とか「ベリ ナイス」とか「サンキュー ベリ マッチ」とか必ず補強^{つげ}でこの「ベリ」、正しくは「ヴェリ」を沢山使っているものだ。使い過ぎは平凡になる。

そう言えば日本語でもそういう場合は「大変～」、「大変…」と気がねして持

ち上げているようである。そしてもう気がねどころか、持ち上げどころかもう何のことなく不感症になって「大変～」、「大変…」とやっているのである。

だからもし本当に「大変～」と言う必要のある場合は語気を強めるとか繰返しをするかで又補強することになる。そのことも又英語も同じである。

そういう言葉が‘very’なのである。

2. veryの真意とまつわる意味

そのようにVery goodとかVery niceとかThank you very muchとかに付いてまわるように、時にIt is so good of youとかIt is awfully kind of youとかのようにsoとかawfullyとかを代わりに使ったりはするが、veryは「大変」とか「非常に」とか「本当に」とかの通りに形容詞や副詞の程度を強めることば即ち強意辞 (Intensifier) なのである。普通は「大変」、「非常に」の意味で、いやもう何でもいいのである強めの記号か何かでも、ただ何となく頻用されている。ただ本当はveryの真意は「本当に」である。英語で表わすならばtrulyに等しい意味である。ただ‘greatly’とか‘extremely’等で表意することもできるし、また辞書でもそうやっているのがあるが、これは丁度、本当に丁度veryの日本語での一番当り前の意味「大変」「非常に」に当るもので面白い。これは、言葉というものは原意を10年、100年、数百年とそのまま持続することができないことがあろうし、極端な場合には低下 (Deterioration) や向上 (Amelioration) という現象も起すのであるから、当然である。veryも長い間使われている中にgreatlyやextremelyの意味になってきたのであり、そこに強意辞としての真骨頂がある。

真意の方のtrulyの意味は根源的には今から探ることになるが、現代英語においても次のようなveryの関係諸語を感じてもらえばホホーということになる筈だ。

- (1) $\left\{ \begin{array}{l} \text{verify} \\ \text{verification} \\ \text{verity} \end{array} \right.$

例えばverifyはshow the truth of somethingのことだからである。

3. veryとアキノ大統領又は比政変

昔はデマが空からビラで舞い降りるぐらいで真偽の程が判らないものであったが、現代はラジオに加えてTVがあるのだからもうどうしようもない視聴覚づくめの情報戦が戦争を決することにもなる。「情報戦、決起派勝つ 国営放送奪い合い」¹⁾と比政変を新聞が報じた。

その時記事に出たTV局名がVOP（国民の声）とラジオ局名がヴェリタス（真実）²⁾である。このヴェリタスというのはラテン語のveritas³⁾のことである。このラジオ局がカトリック教会系の放送であるという記事があったので正しく領ける名前である。

4. veryの起源

それではveryは英語の本来語ではない、上述の通りラテン語に元があるのであるから。辞書をひくと古期フランス語から中期英語期に英語に入ってきた（OF *verai*→ME *verai*）ことが分るだろう。この古期フランス語*verai*は現代フランス語では*vrai*（=true）である。昔読んだMaupassantの短編⁴⁾の中にこの語が丁度よい文脈に入っている行があるので挙げよう。

(2) Elle poussa un cri de joie.

—C'est vrai.⁵⁾ Je n'y avais point pensé. *La Parure*

(She uttered a joyful cry.

—That's true. I've not thought of it at all.⁶⁾ *The Ornament*)

注1) '86年2月25日 朝日、縦書き。

2) 実際には新聞には「ベリタス（真実）」である。

3) 次例等を参考までに、

Alterum suspendit in patibulo, ut coniectoris ueritas probatur GENESIS XL I -22 (= The other he hanged in the gallows, so that the truth of the interpreter was proved)

4) Guy de Maupassant: *LA PARURE*, Traduite et annotée par K. Koizumi, Daigakushorin, Tokio, 1963

5) 以下下線は著者による便宜上の印である。

6) 以下各現代英語訳は著者なるべく逐語訳を試みたものである。

(3) Jules, qui...⁷⁾, devint tout à coup un bennête homme, un garçon de coeur, un vrai Davaranche,... *Mon Oncle Jules*

(Jules, who..., at once became a good person, a courageous fellow, a true Davaranche,... *My Uncle Jules*)

そのように現代フランス語でも vraiは動詞の補語とか名詞に付加されて trueの意味の形容詞として使われている。

古フランス語から veraiをとり入れた中期英語期には初めの中ではやはり同じように trueの意味の形容詞として次例のように使われた。

(4) He was a verray parfit gentil knight *ℓ.72, The Prologue, Canterbury Tales.*

(=He was a true, perfect and gentle knight.)

(5) ..., who schal bitake to 3ou this that is verri? *Luke XII-11*

(Wycliffe) (=...who shall talce to you that which is true?)

こうしてこの借用語 verrayは中期英語においても大元通り形容詞として使われ始めたようである。

5. veryに対応する古期英語、又は「本当に」という古期英語は何だったのか

ここまでもそうであったが、「本当に」という言葉は意味的に大きく見ても二種類のパターンに典型するので、そのように整理して述べよう。

A型) 局所的な場合—— { 当該語 + 形容詞 }
 { 当該語 + 副詞 }
 (強意辞)

B型) 大局的な場合—— { 当該語 + 文 }
 { 主語, + 当該語, + 述語 }
 (文修飾語)

7) 以下点線は著者による便宜的省略の印である。

8) { } 記号はいずれかの選択を意味する。

A型) 強意辞として局所的に働く場合

文中のある要素, ここでは形容詞又は副詞の程度を強める語即ち強意辞(Intensifier)としては, 古期英語ではswyðe [swjuðə] という語がある。これはこのパターンで使われているのによく遭遇する語である。次のような文例で使われている。

- (6) 7 hi wæron swyðe gode. *Genesis* I₋₃₁
 (=and they were very good.)
- (7) ... poet wif wæs swyðe wlitig. *Genesis* XII₋₁₄
 (=...the wife was very beautiful.)
- (8) ..., [hig] fægenodon swyðe myclan gefean *Matthew* II₋₁₀
 (=..., [they] had a very great joy.)

このOE swyðeという語は形容詞swyðに副詞語尾-eが付いた語であり, 形容詞swyðは次の例文における通る「強い」という意味で使われていたのである。

- (9) He hefde þa his swyðran hand ofer Efraimes heafod, *Genesis*
 LXV III₋₁₄(=He had then his stronger hand over Ephraim's head,)

又関係語で次例の通り動詞に使われたswyðranがある。

- (10) 7 ðæt wæter swyðrode swylce ofer eorðan; *Genesis* VII₋₁₉

B型) 大局的に文修飾語となっている場合

副詞であるが, 文頭位置又はかなり文頭近くにあつて, 普通の副詞と異つて文修飾の副詞, 又は接続詞ではないが, かなり連繫辞的役割をするパターンにある場合である。これに soþlice, witodlice, eornostlice等があつてよく使われている。次のような例である。

- (11) Soþlice ic eow secge, *Matthew* X₋₁₅
 (=Truly I say to you,)

9) 現代英語のright hand (右手) のことである。当時は「より強い手」と言っているのである。ちなみに「左手」のことを「より弱い手」wynstran handといていた。本用例文の直後に続いて出ているので, 合せて一挙に挙げておく。

He hefde þa his swypran hand ofer Efraimes heafod, ..., 7 hys winstran ofer Mannases heafod, *Genesis* XLV III₋₁₄

- (12) Seo eorðe soðlice wæs idel 7 æmti, *Genesis* I-2

(=The earth soothly was void and empty,)

このOEの soðlice等はそれらが対応する俗ラテン (Vulgate Latin) 版聖書での語は uero, igitur, autem等である。ueroはveroのことであるから「本当に」という副詞であり、形容詞verusや名詞verumと同系語である。veroを含む文例は次の如きものである。

- (13) Dixit uero Deus : *Genesis* I-9 (=God truly said :)

- (14) Adam uero cognouit uxorem suam Heuam : *Genesis* IV-1

(=Adam truly knew his wife Eve :)

従って、こうしてとうとう突き当たったものがラテン語のveroであり、これが、英語veryの直接の本ではないが、大元であることになる。

6 中期英語以降において

A型) 局所的副詞としての方

形容詞や副詞の程度を強める強意辞の方は、古期英語の swyðeが switheの形で中期英語に一応受継がれはするが、その中期英語では ful等の語はよく使われているものの、very系の語は仲々現われない、勿論前掲の通り形容詞としては使われているのであるが。OEDによるとこのパターンでのveryの初出は15^c (1470) となっている。私が見出したのは、今のところ16^c (Tyndale訳聖書, 1526) で、次の例である。

- (15) When his other fellows sawe what was done, they were very sorry.

Matthew XV III-31

そうして後は遂に近代英語以降veryは頻用されてきたのである。

B型) 大局的副詞としての方

古期英語期に頻出する soðliceは中期英語でも受継がれ soðliche, sothli, soothli等の形で使われているが、一方 veraili, verreiliche, vereley, verrelyという新顔が出てくる。この後者は綴りが色々異なるだけで同じ語であり、結局の所既述の古フランス語からの借用語 veraiに英語本来語の副詞語尾 -liche, -li (これは現代英語の -ly のことであり、又結局は古英語の -lice のことであるが) が

付いた混血語 (Blending) なのである。以後初期近代英語でTyndale訳とか欽定訳とかにverilyとかで残るが、現代英語では殆んど使われていないだろう。

これらA型・B型両方ともそれぞれ古期・中期・近代英語の各用例の対応が判然とするように各並列で用例を挙げておく。

A型)

- (16)¹⁰⁾ { 古期英語版—hi wæron swyðe gode. Genesis I -₃₁
 中期英語版—and tho weren ful goode. " "
 近代英語版—and behold, it was very good. " "

B型)

- (17) { 古期英語版—Soþlice ic eow secge, Luke X II -₃₇
 中期英語版—Treuli I seie to 3ou, " "
 近代英語版¹¹⁾—Verely I saye vnto you, " "

- (18)¹²⁾ { 俗ラテン版—Adam uero cognouit uxorem suam Heuam:
Genesis N -₁
 古期英語版—Soðlice Adam gestrynde Cain be Euan his gemæccan,
 " "
 中期英語版—Forsothe Adam knewe Eue his wijf, which conseyuede,
 " "
 近代英語版—And Adam knew Eue his wife, and shee conceiued, and
 " "

10) 菅沼 惇編 (1989) *GENESIS IN 4 VERSIONS* pp.10~11参照。なお、同書同頁ではVulgate Latin版での同語の対応語がualde (=valde) であることも一瞥同時に判るようになっているのでそれも関心のある方は参照されたい。又このvaldeという語も面白いことばで、関係語にvalere (= be strong, be able) やvalidus (= strong, powerful) 等があり、又それらはそれぞれvalueとかvalidとって英語に入ってきている大切なことばなのである。(探究する (=sapio) ことは楽しいことである、だから人間のことをHomo sapiensと言うのだろう。) 更に又ラテン語でもこのA型のvaldeとB型のveroとが対照されてくる。

11) Tyndale版。

12) 菅沼 惇編, 前掲書pp.28~29.

7. まとめと鳥瞰

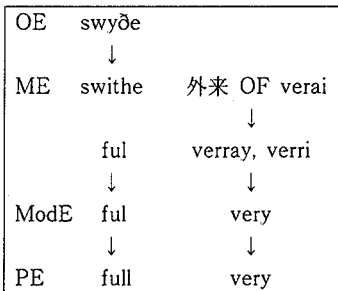
以上色々とveryにまつわることどもを私があちこちで突き当たったことどもで探ってみたが、まとめておこう。

「非常に」とか「大変」「本当に」という局所的強意辞は古期英語ではswyðeという語があったが、これは中期英語でswitheとして受継がれたが、一方古期フランス語からvrai乃至はverreiが借用され、形容詞又は副詞として使われた（この形容詞のvraiに対応する古期英語はtreowe (=true)である。swyðeの形容詞形のswyðはstrongの意味である。）が副詞の方は仲々使用頻度がなく、英語本来語のfulがよく使われ、近代英語期になるとveryが副詞によく使われて現代英語に至ったようである。

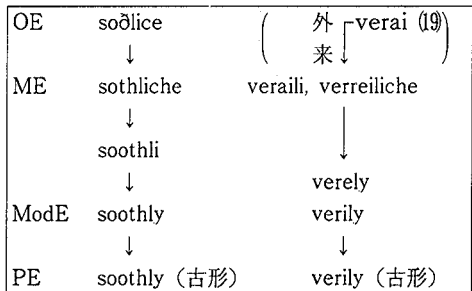
又このverai系の語なるものは、それに英語本来語の語尾-li又は-lyを付けてveraili, verrelyという語として文修飾語として大局的に使われた。それが中期英語期のことである。そのパターンで使われる古期英語のことはsoðlice等であった。この語は俗ラテン語版の聖書ではuero (=vero) 等と対応する語の一つである。古期英語soðliceは中期英語に受継がれsothlice, sothli等として使われ、現代英語にまでsoothly (古形) として残る。

鳥瞰図

(19) 局所型強意辞



(20) 文修飾語型



こうして英語veryは直接的には古期フランス語veraiから入った語であるが、間接的には更に又遠くラテン語veroにその源を発していたことになる。

引用書目

- 1) 朝日新聞 (2月25日 (1986) 付)
- 2) Biblioteca de Autores Cristianos (eds 1982) *Biblia Sacra iuxta Vulgatum Clementiam*, Mateo Inurria, Madrid
- 3) Bosworth, J (eds 1886) *Gothic & Anglo-Saxon Gospels in parallel columns with the Versions of Wycliffe & Tyndale*, London; Reeves & Turner
- 4) Crawford, S. J. (eds 1922) *The Old English Version of the Heptateuch, Aelfric's Treatise on the Old and New Testament and his Preface to Genesis*, Oxford University Press
- 5) Forshall, J. & Madden, F (eds 1982) *THE HOLY BIBLE, containing THE OLD AND NEW TESTAMENTS, with The Apocryphal Books, in The Earliest English Versions made from The Vulgate by John Wycliffe and His Followers*, Oxford, an the University Press.
- 6) *THE HOLY BIBLE, an exact reprint in Roman type, page for page of THE AUTHORIZED VERSION in 1611*, OUP, OXFORD, KENKYUSHA, TOKYO, 1985
- 7) 菅沼 惇編 (1989) *GENESIS IN 4 VERSIONS—OE, ME等への入門として—*, 大阪教育図書.
- 8) 市河三喜編 (1934) *Chaucer's THE CENTERBURY TALES, THE PROLOGUE*, 研究社.
- 9) 小泉清明訳注 (1963) *Guy de Maupassant: LA PARURE*, 大学書林.